

## 回 顧 2 5 年

葛 西 善 三 郎

食糧科学研究所は昨秋25周年を迎えた。そして創立当初から勤務している者は、いつの間にか私一人になってしまった。昭和21年といえ、戦後もまだなまなましい時であって、食糧の欠乏と人心の混乱はきびしさを加え、正直なところ落ちついて図書に親しみ、研究にいそむなどというような状態ではなかった。設立に当って建物の予算はなく、実験器具や薬品を買う経費さえもほとんどつかず、また売ってくれる店も品も極めて乏しかった。まして、外国図書など手にとることも出来ず、国内では裏の字がすけるようなざら紙に印刷されたものが、時々出版されていたが、日を追ってその定価は高騰していた。

東京に外国雑誌の図書館が進駐軍の手で開かれたと聞いては、無理をして出かけ、片っぴしからむさぼるように読みふけた。3日間の予定が1週間にも延びた。近くの日比谷公園で、昼の代用食を食べようとして、浮浪児にとりかこまれ、一つ残らずもってゆかれたのも忘れられない。その後、京都にも四条烏丸にクルーガー図書館というのが開かれ、数多くの新刊洋書が入った。連日のように通い、中にはほとんど一冊筆写したものもあった。複写法の簡便化したこの頃のことなど、全く考えも及ばぬ時代であった。

やがて、少しずつ落ちつきを取戻し、研究所でも、外国雑誌を購入したいという話が会議の席で出るようになって、廊下に狭いながらも本棚が並ぶようになった。そうしていつの間にか数十種の外国誌でふくれ上るようになってしまった。

一昨年、研究所が宇治地区へ移転することになり、五研究所でこれらの雑誌が同じ図書館に保管、陳列されることになったのを機に、かなりの整理が行なわれた。重複をさけ、無駄をはぶき、それぞれの研究所が独自の特色あるものを分担して重点的に揃えることになった。経費は節約され、利用は能率的になり、保管は合理化された。新着の各種雑誌がズラリと並べられているのはまったく壮観である。

それにしても25年というこの年月の変わりようは全くすさまじいものであった。これからの25年は果してどのように変わってゆくのであろうか。それに対する備えは、もうそろそろ始めねばならないのではないだろうか。

(食糧科学研究所教授)